# ルイス・ゴメス「文字通りに文献を読解することに関して ── 教理以前の具体的イメージ ──」に対するレスポンス

デニス・ヒロタ
龍谷大学教授

私が考えるに、ゴメス教授の非常に入念で、博学な本稿には、浄土仏教の伝統を研究する人、あるいは、その伝統に属する実践者にとっても、熟慮すべき多くの事柄が含まれる。

ゴメス教授は、我々の大半が、大乗仏教経典に対して行なう読解、ないし解釈の実践に関する根本的な問題を提起している。そして、とりわけ、無数の仏や菩薩、そして仏土を、象徴的、あるいは倫理的な用語で理解し、それによって、そのテキストを、教理的な内容へ還元してしまう現代の傾向に挑戦する。彼は、そのような読解において、より直接的な、あるいは基本的なレベルの意味、すなわち具体的で、文字通りの「想像上の」、あるいは写象主義的な意味が、手に余って退けられていないかと問う。彼が意味するのは、大乗仏教の起源、具体的には、歴史的な仏陀から宇宙的な仏陀、そして、宇宙を埋め尽くす仏土へ向かっての転換、またその先にある、無数の天上の仏や菩薩から、特定の仏、菩薩、仏土への関心の集中への大乗仏教の認識に起こる転換について、何らかの批判的な疑問を考える上で必要なテキストの情報源を、そのような教理的に図式化された読解が、覆いかくすかも知れないということである。

ゴメス教授は、これら幅広い疑問を提起すると同時に、写象主義的な細部に注意を払った読解、つまり、倫理的な理想像としての、菩薩について、世間一般に受容されている前提に基づく理解に対して、何らかの是正策を提供する読解の事例を提案している。彼は、二種の漢訳『華厳経』それぞれの結論部で述べられる、普賢菩薩と彼の誓願に関する部分を比較考察し、その大要を記述している。

私が考えるに、三種の緊密に関係した層、あるいは、関心の同心円が、本稿の中では区別されている。

中核となるのは、仏馱跋陀羅の翻訳（420 年頃）中、普賢菩薩を取り扱った偈と、それより 3 世紀半の後に完成したという、般若による *Gaṇḍavyūha* の翻訳（798 年頃）中の対応する韻文および散文とを比較する読解である。ゴメス教授は、これらを時系列とは逆に取りあげることで、般若の翻訳の中でも、とりわけ、普賢菩薩の誓願に関して、序文的な性質を持つ散文の解説中に存在する節が、「倫理的」な重大性、すなわち、大乗仏教の実践者にとって、実行可能な菩薩道における行動のモデルとしての普賢菩薩という観念を備えていることを、第一に指摘する。

彼は、それから、誓願に関する散文の説明を欠いた、より初期の、仏馱跋陀羅の翻訳へと転じて、そこでは倫理的な目的が不在であること、そして、その偈を支配する主題が、普賢菩薩により具現

化された、功徳と智慧の奇跡的な力の記述にあることを示す。

私は、ゴメス教授の中心的な論点とは、仏駄跋陀羅の翻訳の方が、より厳密に、華厳経典群の本来の結論を表現している、ということだと考える。すなわち、普賢菩薩の偈は、仏駄跋陀羅訳では、元来は独立した儀礼、あるいは、儀礼的な韻文が編入されたことを表している、さらに、その偈の編入は、華厳経典が正当性を獲得すると同時に、同経典へ、その正当性を分与するものでもあった。そして、般若訳は、特にその倫理的なモチーフにおいて、より教理的に方向付けられた、儀礼からの解釈的な転換、すなわち、倫理的な模範として、普賢菩薩の願と行でもって最高潮を迎えるという、一般にも広まった、*Gaṇḍavyūha* 全体に関する現代的、ないし哲学的な理解へとつながっていく転換を表現しているのである。

しかしながら、ゴメス教授の関心は、この、様式批評の一種とも見えるものにとどまらない。教授は、二種の漢訳間のなお一層の相違として、般若では、阿弥陀の浄土に重要性を与える一方で、それに先行する仏駄跋陀羅訳が、あらゆる微塵が、無数の仏と仏土で満たされた宇宙という、より一般的な宇宙のヴィジョンを伝えていることを指摘する。

ゴメス教授は、ここで、特定の一部熱狂的な信奉者にのみ支持された実践を越えて、より幅広い「幻想的な」宗教性へと進むことによって、浄土教の伝統の起源を探っているように、私には考えられる。このことが、おそらくは、関心の同心円の第二のものを形成している。それは、主として教理的な枠組みに、彼らの象徴的、暗喩的な解釈へと向かう傾向を、最初から強いることをせず、テキストにおいて、具体的かつ「想像上の」ものとを、直接的に対峙させることもしないような読解への招きである。

しかし、さらにもう一つの関心の層がある。それは、広い意味において、「浄土」の思想や信仰を可能とするものが何なのかを探求することである。ゴメス教授は、ここで、近年の宗教の認知的研究において発展させられた概念と構造のいくつかを援用する。これらの研究は、しばしば、広くは人類学的であるが、宗教現象に関する一般的、かつ、広く包括的な定義を提起する。ゴメス教授も言及するハーヴェイ・ホワイトハウスは、宗教に関して、「超自然的な作用（agency）へと訴えかける行為と信仰のすべての集合体」と言っている。ここでは、作用は、人間の認識における基本的な範疇として了解されている。何らかの特定の宗教伝統にとっての根本的な疑問とは、その起源と伝承とに関係する。そして、これらの課題は、ゴメス教授自身が、浄土教の伝統に関して提起する主要な問題にとって一つの枠組みを提供するものでもある。

起源に関しては、ゴメス教授は、次のように問う。「浄土思想は、浄められた仏土の中で具体化される、菩薩の誓願の力への信仰として広く理解されるが。何が、その浄土思想の前提であるのか」。そして、あらゆる耐久力と展開にとって鍵である伝承に関して、ゴメス教授は、次のように問う。「古代インドに生きた聴衆に浄められた仏土の存在を信じさせたものとは、一体、何だったのだろうか」。

ゴメス教授の論考における議論は、最初は、人間の宗教性へと向けられた、極めて幅の広い関心

から、テキストを比較する詳細な分析へと、言わば中心へ向かって進み、その後に、「物語の宗教としての仏教」の中で、説明されるというよりは、むしろ描写されている、「未だ分化していない、仏の悟りへの一般的な信仰」を提案することへと、再度、外へ向かって帰ってくる。ここには、教理への没頭の中で見落とされてきた文献の一次元だが、浄土教の伝統の初期的段階を表す「幻視の雄大さ」がある。

最終的に、ゴメス教授は、物語の作用という概念、あるいは、「物語の言説を通して、あるいは、テキストを通しての展望（vista）の描写によって構築される世界」という概念は、彼が論じるテキストにおける、現実性の喚起を理解するためにも用いられうると提案するに到る。彼は、そのような概念が、宗教の認知的研究において、広く有用であるかも知れないと示唆する。

ゴメス教授の論考は、浄土教の伝統を研究する者にとって、重大な意義を持つものである。何故なら、浄土思想の登場、形成と伝承を、さらには、物事を変化させるという菩薩の力の観念をも含め、全てを可能とした大乗仏教の思潮と推進力の、初期の、発生期における構成要素へさかのぼるための方法を、ゴメス教授は、展開しようとしているからである。

このようにして、ゴメス教授は、大乗仏教の伝統に関する、極めて倫理的な、そして、哲学的な読解に対する是正策を提供している。たった十年前のことだが、宗教研究に携わる学者、そして、仏教研究に携わる学者は、浄土教の伝統、とりわけ日本におけるそれは、「空の教え」を主張しなかったということで、真正な大乗仏教ではないということを主張することも出来たのである。

同時に、浄土教の伝統に関係するために、宗教の認知的研究の様々な局面を提示することは、起源と伝承の両方に関して、極めて示唆に富む。ちょうど、宗教研究に携わる研究者にとって、日本が仮想研究室として機能してきたように、浄土真宗は、宗教性の教理上の様式の、典型的な事例であるのかも知れない。ちょうど終わったばかりの（※2011 年 8 月 4 日当時）、毎年一回、夏期に挙行される研究集会である「安居」は、例えば、規則化された反復行為のテンプレートといえる。ゴメス教授の論考では、「信」（信仰、belief）という用語は、おそらくは、認知的研究の立場から、基礎的な範疇と受け取られており、したがって、浄土思想とは、その菩薩の誓願の力への信として定義される。それと同時に、宗教的実践という意味の「行」（practice）の語が、翻訳経典の中には、かなりの頻度で見いだされるが、ゴメス教授の註釈においては、その行の語は、敬遠されているようにも思われる。おそらくは、倫理的、ないし教理的な解釈へと、拙速に飛躍してしまうことを避けるためだろう。もし、ゴメス教授の「物語の仏教」という提案において、実践のもう一つの形式として、読解そのもの、あるいは、テキストや言語への関与そのものという概念を見るのが、正しいとすると、それこそが、浄土の仏道の根源を探求する上で、最も有益な手段を切り開くとも考える。ここで、物語そのものは、没頭する参与者へ向かって働く作用を保持している。さらに、そのような物語がどのように働くか、それも、終了へと向かって、いかに働くかを正確に探求することは、従来の、宗教研究における信の観念を豊かなものにし、通常の信の観念を越えていくための方途を切り開くかも知れない。